

保健体育科教育実習生の実態調査 —公立学校と私立学校の違い及び教育実習生の苦楽に与える要因の分析—

徐 広孝¹⁾・中西健一郎²⁾・和田雅史³⁾・小澤治夫⁴⁾

A Survey on Practical Teachers of Health and Physical Education Course -Analytics of the Difference in Public and Private School, and the Influence Factor of Practical Teacher's Pleasure and Difficulty-
Hiroataka JO, Kenichiro NAKANISHI, Masafumi WADA and Haruo OZAWA

Abstract : The purpose of this study was to investigate the differences of class hours and lesson plan creation between public schools and private schools in practical teachers of health and physical education, and to clarify the influence factor of "pleasure and difficulty". A questionnaire survey was conducted for students of the Physical Education Faculty in a university (n = 50), who conducted teaching practice at junior high schools or high schools. As a result of two-way ANOVA, the class hours conducted by the practical teacher was significantly greater in physical education than in health education, but as compared to the instruction manual, it was not high or low. In addition, while the class hours at private schools tended to have a larger than public, the influence of private schools on the increase in class hours was small, judging from the effect size. Although there was no difference between public and private about lesson plan creation and unit plan creation, the frequency of creation and the presence or absence of creation differed depending on the practical school. The word of "students" and "lessons" in teaching practice had an influence on both pleasure and difficulty felt by practical teachers. In words of and "health education" were affecting both pleasure and difficulty, words of "physical education" affected only pleasure, suggesting the necessity of improving health education for practical teachers at university. In addition, it became clear that the lack of time to prepare classes and prepare lesson plans is a major cause of difficulty.

Key words : practical teachers, health and physical education, public school, private school, pleasure and difficulty

1) 筑波大学附属駒場中・高等学校
〒154-0001 東京都世田谷区池尻4-7-1

2) 東海大学国際文化学部
〒005-8601 北海道札幌市南区南沢五条1-1-1

3) 聖学院大学人間福祉学部
〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1

4) 静岡産業大学経営学部
〒438-0043 静岡県磐田市大原1572番地1

1. Junior & Senior High School at Komaba, University
of Tsukuba

4-7-1, Ikejiri, Setagaya-ku, Tokyo

2. School of International Cultural Relations,
Tokai University

5-1-1-1, Minamisawa, Minami-ku, Sapporo-shi,
Hokkaido

3. Faculty of Human Welfare Developmental Child
Psychology Department Seigakuin University

1-1 Tosaki, Ageo-shi, Saitama

4. Shizuoka sangyou university

1572-1 Owara, Iwata, Shizuoka

I. 緒言

教育実習は、教育職員免許法および同施行規則を法的根拠とし、教育職員免許状を取得するために必要な必修科目である。同規則には、教育実習の単位数を、高等学校の教員免許に対しては3単位、中学校の教員免許に対しては5単位（いずれも1単位の事前、事後指導を含む）と定めている。しかし、教育実習中に受ける指導は、実習校および指導教員に依存する度合いが高い。藤枝は、教育実習にはアプレンティス型（総仕上げの・見習い修行的）の教育実習観とリサーチ型（研究的）教育実習観があるとし、前者が学校現場での実際の、応用的、技術的側面の訓練の場であり、後者が大学の教育、研究を充実させる場であると捉えている¹⁾。アプレンティス型の教育実習観に基づけば、学生の教育実習中に受ける指導が、実習校および指導教員に依存することは自然である。しかし、それが逆にリサーチ型の教育実習観の実現の妨げになることも少なくない。その代表例が、教育実習中に作成する学習指導案や単元計画である。授業および単元の設計図ともいえる学習指導案と単元計画を作成することは、教員になるために絶対不可欠な能力であるにもかかわらず、それらをまったく作成せずに教育実習を終えることがある。それは、決して無視できない問題である。公立と私立の違いも、大きな要因の一つであると考えられる。私立学校は、個性的な教育目標や指導方針をたてており、公立学校との違いが表れる可能性がある。先行研究では、授業実施時数等の教育実習の実態に関する報告^{2) 3)}がなされているが、公立と私立の違いに着目した報告は見当たらない。

教育実習は、実習生が「自分は本当に教師になりたいのか」、「自分は教師に向いているのか」といった願望や適性を見直す機会でもあり、教育実習中に得た楽しさや苦勞の経験が、自身の願望と適正を判断するうえでの重要な材料となる。ゆえに、授業の実施、生徒とのコミュニケーション、指導教員からの指導、学習指導案の作成、部活動指導、研究授業など、教育実習における様々な要因が、

実習生の苦樂に対してどのように、またどの程度影響を与えているのかを明らかにすることには価値があると言える。しかし、教育実習を構成する要因は様々であり、すべてを質問項目にすることは現実的ではなく、実習生が自身の教育実習を思い起こして印象に残っている内容を自由に記述してもらう方が適した調査方法である。テキストデータの分析方法として近年注目を集めるテキストマイニングには、Dictionary-basedアプローチとCorrelationalアプローチがあり、それぞれに一長一短がある。前者は、コーディング規則を作成することで、分析者の理論や問題意識を自由に操作化し、テキスト型データの様々な側面に自由に焦点を絞れるという長所があるが、都合の良いコーディング規則ばかりが作成・利用されてしまう危険性がある。一方、後者は、多変量解析に大きく依存するため、客観性は高まるものの、理論や問題意識を自由に操作化し追求することは困難である欠点を持つ⁴⁾。樋口⁵⁾は、これらのアプローチを統合したシステムとして、KH Coderを開発し、公開している。KH Coderを利用した研究報告は1,600件を超え、信頼性が高い分析システムであると考えられ、テキストマイニングの分析手段として採用することが可能である。

教育実習についての研究では、授業実施時数等の実態に関するもの^{2) 3)}、実習生の教育実習中の指導方法に関するもの⁶⁾、授業観察力の変容に関するもの⁷⁾、実習生に対する指導教員の指導内容に関するもの⁸⁾、実習生に対する大学側の指導に関するもの⁹⁾などがある。しかし、筆者の知る限り、公立学校と私立学校に分けて教育実習の実態を調査した報告はなく、また、教育実習の要因が実習生の苦樂に与える影響を明らかにした研究も見当たらない。

II. 目的

本研究は、保健体育科の教育実習生の授業実施時数や学習指導案作成において、公立学校と私立学校の違いがあるかどうかを調べるとともに、教育実習の要因が実習生の苦樂に

与える影響を明らかにすることを目的とした。

Ⅲ. 方法

体育学部を設置しているT大学の2014年度教育実習生（学部4年生、n=50）を対象にして、事後指導の時間を利用して質問紙調査を行った。調査項目は次のとおりである。

- ①実習校は公立か私立か
- ②実際に行った「体育」の授業時間数
- ③実際に行った「保健」の授業時間数
- ④学習指導案を|毎時間作成した, 時々作成した, 作成しなかった|
- ⑤単元計画を|作成した, 作成しなかった|
- ⑥教育実習において楽しかったこと（自由記述）
- ⑦教育実習において苦勞したこと（自由記述）

T大学体育学部では、中学校の保健体育と高等学校の保健体育の免許を与えており、対象者の全員が中学校または高等学校で教育実習を行った。実習校が公立学校だった学生は36名、私立学校だった学生は16名であった。

公立学校と私立学校の違いを明らかにするために、「実際に行った体育の授業時間数」と「実際に行った保健の授業時間数」を被験者内要因、「公立/私立」を被験者間要因とした二元配置分散分析を行った。また、「学習指導案を作成した頻度」と「単元計画作成の有無」については、「公立/私立」とのクロス集計を行った。有意水準はいずれも5%未満とした。

教育実習の要因が実習生の苦勞に与える影響を明らかにするために、KHCoder⁵⁾を使用して共起ネットワークを作成した。この分析では、自由記述項目で書かれたテキストを分析対象とし、「楽しかったこと」と「苦勞したこと」をカテゴリー（外部変数）とした。また、「指導案」、「授業準備」、「教育実習」の語を強制的に抽出し、最小出現数5以上で取捨選択した。カテゴリーとの関わりの強さを共起関係の係数として表し、共起ネットワーク図には係数0.2以上の語のみを描画した。

Ⅳ. 結果

実際に行った授業時間数は、公立の体育が 20.7 ± 10.3 、公立の保健が 4.4 ± 3.3 、私立の体育が 29.4 ± 9.8 、私立の保健が 8.7 ± 3.6 であった（図1）。体育・保健の授業時間数を被験者内要因、公立・私立を被験者間要因とした二元配置分散分析（混合計画）では、交互作用（ $df=1$, $f=1.80$, $p=0.19$ ）が認められず、被験者内要因（ $df=1$, $f=122.74$, $p=0.00$ ）と被験者間要因（ $df=1$, $f=17.17$, $p=0.00$ ）の両方に主効果が認められた（表1）。効果量（偏 η^2 ）は、交互作用が0.04、被験者内要因の主効果が0.72、被験者間要因の主効果が0.26であった。その後の検定として単純主効果を確認したところ、「体育」水準における公立と私立、「保健」水準における公立と私立、「公立」水準における体育と保健、「私立」要因における体育と保健、すべてにおいて有意さが認められた（図1）。

表1 「保健・体育の授業時間数」と「公立・私立」の二元配置分散分析の結果

二元配置分散分析（混合計画）				
要因	自由度	F値	有意確率	偏 η^2
(被験者間)				
公私	1	17.17	0.00 (*)	0.26
誤差	48	(53.83)		
(被験者内)				
科目	1	122.74	0.00 (*)	0.72
公私×科目	1	1.80	0.19 (n.s.)	0.04
誤差	48	(60.73)		

注) 誤差における括弧内の数値は平均平方を示す。

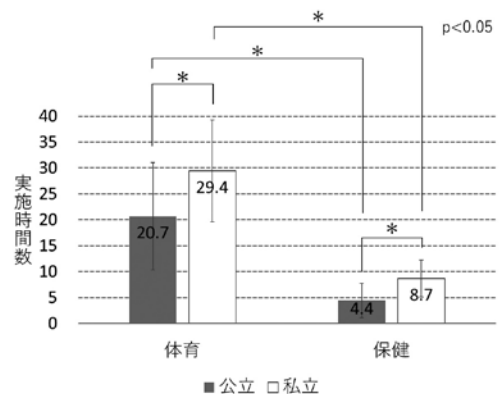


図1 体育、保健および公立、私立の違いによる授業時間数の平均値

学習指導案作成の頻度を公立・私立の違いによって分析したクロス集計の結果では、公立における「毎時間作成した」は52.9%、「時々作成した」は35.3%、「作成

しなかった」は11.8%であり、私立における「毎時間作成した」は68.8%、「時々作成した」は31.3%、「作成しなかった」は0%であった(表2)。Cramerの連関係数(V)は0.22、 χ^2 検定の結果、有意差は認められなかった(df=2, $\chi^2=2.40$, p=0.30)。

表2 公立・私立による学習指導案作成の頻度

	毎時間作成した	時々作成した	作成しなかった	合計
公立	18 (52.9)	12 (35.3)	4 (11.8)	34 (100)
私立	11 (68.8)	5 (31.3)	0 (0.0)	16 (100)
合計	29 (58.0)	17 (34.0)	4 (8.0)	50 (100)

df=2, $\chi^2=2.404$, p=0.301, Cramer's V=0.219
 注) 括弧内の数値は行合計に対する割合を示す。

単元計画作成の有無を公立・私立の違いによって分析したクロス集計の結果では、公立における「作成した」は55.9%、「作成しなかった」は44.1%、私立における「作成し

た」は50.0%、「作成しなかった」は50.0%であった(表3)。ファイ係数(phi)は0.06、フィッシャー正確確率検定の結果、有意差は認められなかった(p=0.77)。

表3 公立・私立による単元計画作成の違い

	作成した	作成しなかった	合計
公立	19 (55.9)	15 (44.1)	34 (100)
私立	8 (50.0)	8 (50.0)	16 (100)
合計	27 (54.0)	23 (46.0)	50 (100)

Fisher's exact test, p=0.767, phi=0.055

注) 括弧内の数値は行合計に対する割合を示す。

教育実習における「楽しかったこと」と「苦労したこと」を自由に記述させたテキストデータから共起ネットワークを作成した(図2)。その結果として算出された関係

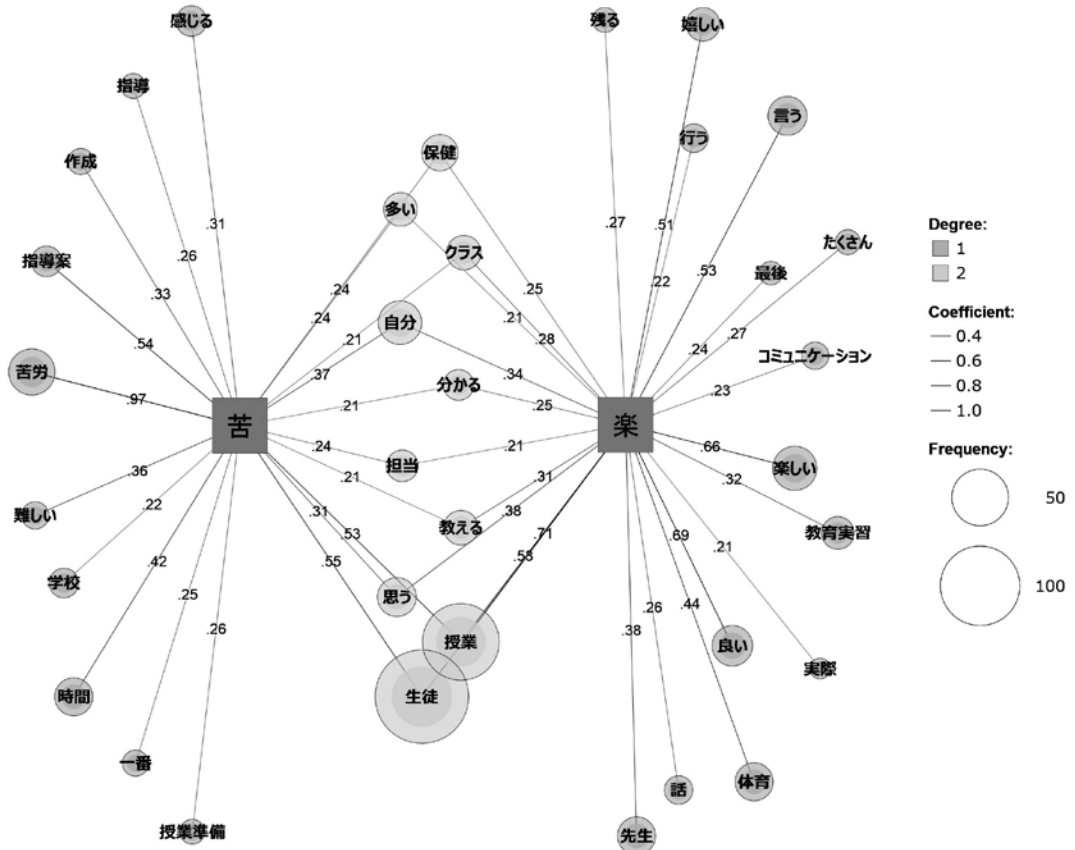


図2 教育実習における「楽しかったこと」と「苦労したこと」に関わる用語から作成した共起ネットワーク

性の強さを示す係数のうち、特徴的なものは次のとおりである。「楽しさ」と「生徒」が0.53、「苦勞」と「生徒」が0.55、「楽しさ」と「授業」が0.71、「苦勞」と「授業」が0.53であり、生徒と授業は楽しさと苦勞の両方に影響を及ぼしていた。「苦勞」と「保健」は0.24、「楽しさ」と「保健」は0.25、「楽しさ」と「体育」は0.44であり、保健は楽しさと苦勞の両方に、体育は楽しさに関係があった。その他、「苦勞」と「指導案」が0.54、「苦勞」と「授業準備」が0.26、「苦勞」と「時間」が0.42、「楽しさ」と「先生」が0.38、「楽しさ」と「教育実習」が0.32、「楽しさ」と「嬉しい」が0.51を示した。

V. 考察

教育実習中に、実際に行った授業時間数が公立、私立によって異なるかどうかを検証するために行った二元配置分散分析では、交互作用が認められず、被験者内要因（保健と体育の違い）と被験者間要因（公立か私立かの違い）の両方に主効果が認められた。これは、科目と公私はそれぞれ独立して授業時間数に影響を与えていることを意味する。しかし、被験者内要因の効果量の値が高値（0.72）、被験者間要因の効果量が低値（0.26）だったことを考慮すると、教育実習生が行う授業時間数は、保健よりも体育が多いことが認められるもの、公立より私立の方が多くと断言するまでには至らない。科目に関しては、学習指導要領に年間授業時数と単位数が示されている。中学校では、保健体育が3年間で315時間（年間105時間）設けられており、そのうち保健が48時間である。高等学校では、3年間で体育が7～8単位、保健が2単位となっている。このことを踏まえると、保健よりも体育の授業時間数が多いことは学習指導要領上の問題であるといえる。また、今回の平均値を見る限り、教育実習生が行った授業時間数においては、体育が極端に多い、あるいは保健が極端に少ないといったことはないと考えられる。しかし、保健の授業時間数が0であった教育実習生が50人中5人おり、保健授業の経験を積むことができな

かったことは問題である。一方、効果量は低かったものの、公立よりも私立の授業時間数が有意に多かったことについては、ほかの要因があると考えられる。例えば、私立学校教員が担当している授業数が多い、学校側の教育実習生に対する指導方針などである。しかし、本研究ではこれらに言及できる調査を行っていないため、今後の課題とする。

クロス集計と χ^2 検定の結果からは、学習指導案と単元計画の作成についての公立と私立の違いは認められなかった。しかし、学習指導案においては、「毎時間作成した」、「時々作成した」、「作成しなかった」の分布が広がっており、単元計画においては「作成した」と「作成しなかった」がほぼ半々であった。学習指導案は、公立、私立という違いではなく、学校そのものの方針または指導教員の方針が大きく影響していると同時に、教育実習生の能力に応じて作成させるといった可能性も考えられる。しかし、学習指導案は授業の設計図でもあり、授業準備において極めて重要なプロセスである。それにもかかわらず、学習指導案を一切作成せずに教育実習を終えているケースがあり、これについては改善の必要があると主張したい。単元計画作成の有無が半々になっている理由は、教育実習が3週間という短期間であるため、一つの単元の初めから終わりまでをやりきれないことが考えられる。

教育実習生が経験する苦樂が、教育実習のどの要因と関係しているのかを共起ネットワークによって分析した。「生徒」と「授業」の語は、それぞれ「楽しさ」と「苦勞」の両方に強い関係を持っていた。実際に、「生徒の反応が良かった」、「生徒への指示が難しかった」、「最後に最高の授業ができた」、「授業で失敗して辛かった」といった内容の文章が多く書かれており、生徒と授業は、苦樂の両方の要因になることが明らかになった。科目に着目すると、「体育」は「楽しさ」と中程度の関係があり、「保健」は「楽しさ」と「苦勞」の両方に弱い関係を持っていた。この結果から、保健の授業を楽しむことができた者がいた一方で、苦手意識を抱い

ていた者もいたと考えられる。また、保健体育教師を目指す学生の多くが豊富なスポーツ経験を持ち、実技科目の体育に対する苦手意識がないが、教室での保健に苦勞していたと推測され、すなわちそれは、大学側の指導として、保健を充実させる必要性があることを意味している。その他、「楽しさ」と関係を持つ語は、「先生」、「教育実習」、「嬉しい」であった。これは、「先生と呼ばれることが嬉しかった」や「とても充実した教育実習になった」などの記述が書かれており、教育実習そのものが成功したケースが多いためであろう。逆に、「苦勞」との関係があった単語は、「指導案」、「授業準備」、「時間」であった。これらの語から推測できることは、授業準備の時間が確保できず、学習指導案の作成が大変だったことである。実際、学習指導案を毎時間しっかりと書いて授業をする専任教員はほとんどいない。それは、生徒指導や部活動指導、事務的处理などに時間をとられ、学習指導案を書いている時間がないからである。教育実習生は専任教員に近い仕事を行うので、時間不足で授業準備、指導案作成が追いつかない。それゆえに、「学習指導案を毎回作るよりも、生徒と触れ合う時間のほうが大切」と考える指導教員がいてもおかしくはない。

VI. 終わりに

本研究は、保健体育科の教育実習生の授業実施時数や学習指導案作成において、公立学校と私立学校の違いがあるかどうかを調べるとともに、教育実習の要因が実習生の苦樂に与える影響を明らかにすることを目的とした。中学校または高等学校で教育実習を行った体育学部の学生 (n=50) を対象にした質問紙調査から、以下の結果を得た。

1. 教育実習生が行った授業時間数は、保健よりも体育のほうが有意に多かったが、学習指導要領に示されている時間数に対して、極端に多かたり少なかつたりするわけではなかった。また、私立学校での教育実習は公立よりも授業時間数が多い傾向があったものの、効果量の値から判断して、

私立学校が授業時間数の増加に及ぼす影響は小さかった。

2. 学習指導案と単元計画の作成についての公立と私立の違いは認められなかったが、作成の頻度や有無は、実習校によって差があった。
3. 保健の授業を一切やらなかった、学習指導案を一切作成しなかったという教育実習生がおり、この問題は解決すべきである。
4. 教育実習における生徒と授業は、教育実習生が感じる楽しさと苦勞の両方に影響を及ぼしていた。科目別では、保健は楽しさと苦勞の両方に、体育は楽しさのみに影響を及ぼしており、教育実習生の保健授業力の向上が必要である。また、授業準備や指導案作成の時間がないことが、苦勞の大きな要因であることが明らかになった。

【参考・引用文献】

- 1) 藤枝静正. 教育実習学の基礎理論研究, 風間書房, 2001, p.129
- 2) 姫野完治. 教育実習の実態に関する基礎的研究—教職志望学生への質問紙調査を通して—, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, vol.25, pp.89-99, 2003
- 3) 勝亦紘一, 家田重晴, 深井一三. 保健体育科の教育実習に関する調査研究—体育授業からみた実習生の実態と課題—, 中京大学体育学論叢, vol.27, no.1, pp.63-72, 1985
- 4) 樋口耕一. テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—, 理論と方法, vol.19, no.1, pp.101-115, 2004
- 5) KH Coder. 製作 樋口耕一, <http://khc.sourceforge.net/>
- 6) 教育実習における効果的な指導のあり方に関する研究(2)—教育実習生の授業における小集団学習の場面の分析を通して—, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, vol. 45, pp.53-63, 2017
- 7) 三島知剛. 教育実習生の実習前後の授業観察力の変容—授業・教師・子どもイメージの関連による検討—, 教育心理学

研究, vol.56, pp.341-352, 2008

- 8) 岩田昌太郎, 松岡重信, 木原成一郎. 教育実習における指導内容に関する事例研究—実習日誌とインタビューを手がかりに一, 体育科教育学研究, vol.22, no.2, pp.1-10, 2006
- 9) 内田雄三. 教育実習における学生の成長—中学校保健体育科の授業実践を通して—, 白鷗大学教育学部論集, vol.9, no.1, pp.179-199, 2015

